



京大人の道 COMPASS

Profile

2009年京都大学法学部卒業。京都市内のコーヒー店を舞台に描くミステリー小説『珈琲店タレーランの事件簿 また会えたなら、あなたの淹れた珈琲を』で2012年に作家デビュー。同作は第10回「このミステリーがすごい!」大賞最終選考、第1回京都本大賞受賞などの実績を誇る。シリーズは累計130万部を超えるベストセラーとなっている。現在は京都を離れ、東京で作家活動を行っている。

『珈琲店タレーランの事件簿』シリーズ作者 京大卒ミステリー作家

O k a z a k i T a k u m a

岡崎 琢磨 氏

—寺院の方を継ぐというお考えはなかったのですか？

なかったですね。僕は別に坊さんになりたくなかったんですよ。例えば僕が坊さんのことをできるようになったら、僕はあまり器用じゃないからきっとそれで忙しくなって、音楽活動なのか小説なのかはともかく、自分のやりたいことはできなくなるんだろうなって思っていたんです。そうやってやりたいことをできなくなった自分に絶望するということまで、自分の中ではしっかりビジョンとして見えていたのです。

だけど一方で、今小説家になってこうやって食っていているというのは結果オーライとしか言いようがないんですよ。小説家を目指しているときどういう心境だったかって、**ダメだったら最悪死ねば終わるから**、としか思っていなかった。だから、小説家を目指している間は必死に努力はしましたけど、どこかに諦めみたいな気持ちがないと、ここまではやって来なかったです。

—文字通り「死ぬ覚悟で」ということですか。

覚悟というような前向きな気持ちではないです。僕という人間には、ものすごくネガティブな部分があるんです。そういう後ろ向きな気持ちとか、ダメだったら死ねばいいっていう諦めの気持ちとかを抱えたまま矛盾せずに生きていけるっていうのが、ミュージシャンとかそういう表現活動で生きていく職業しか、僕には見当たらなかった。そういった中で高校から続けていた音楽を辞めて小説にシフトしたっていうのは、僕にとってはすごく自然なことでした。

—やりたいことを犠牲にしてまで欲しい職ではなかったと。

全くなかったです。だから僕は、こういう道もあるんだっていうのをいろんな人に示したとは思っているし、それは声高にしていきたいと思っているんです。例えば企業とかに就職しても、それが肌に合わなくてつらい思いをしている人もたくさんいるわけじゃないですか。そういうときに、そんなつらい思いに耐えてまでその仕事を続けるべきなのかという意味では、僕みたいな人生もあるよって言いたい気持ちはすごくあるんです。

小説家になるまで — ダメだったら最悪死ねば終わるから

—小説家になろうと思われたきっかけは何ですか？

最初のきっかけは面白いミステリー小説が書きたいなというところですね。中学ぐらいから結構読書好きだったんです。ただ高校に入ってバンドを始めまして、それから読書はあまりしなくなりました。大学を卒業してからまた読書をするようになって、やっぱりミステリー面白いな、と思ひまして。そこから、音楽を辞めようかどうしようかっていうのと、小説を書いてみたいって気持ちがちょうどバトンタッチされたという感じです。

—周囲から反対の声もあったのでは？

しばらくは小説を書いていること自体を周りに伏せていたので、周りの反対がなかったというよりは反対を許すほど周りに言っていなかったというのがあります。言ったってどうせ真に受けられないでしょうし。小説家になりたいと思ってるってところで、なれると思ってくれる人は誰もいないですから(笑)。だから応募した作品が選考に通り始めて、「あ、意外といけるかも」っていうところでようやく他人に言い始めましたね。

それまではずっと父親のお寺を手伝っていました。でもお寺の手伝って常にやることあるわけじゃなくて、留守番とか空き時間の多い仕事だったので、そういう空き時間にPCを持ち込んで執筆をしていました。



(情・院 とりど〜る玲奈)
(模範的読者様です；編)

小説家という職業 — 人の心の動きが織り込まれた小説に

—学生時代の経験で今に活きていることはありますか？

デビュー作が京都を舞台にしているので、当時の生活というのは密接に小説家になったこととリンクしてきますよね。タレーランを書こうと思ったときに、実在する地名・土地を舞台にするんだしたら、もう下宿している京都か地元である福岡しか僕の中で選択肢がなかったんです。京都といえば珈琲・喫茶店の文化が盛えている街なので、じゃあ京都でやってみるかなと。

—珈琲・バリスタを題材にしようと思ったきっかけは？

小説を書きながら、探偵のステータスが重要になってくるなっていうのは感じていたので、次の探偵役は何の職業にしようというの普段から探していたんです。そのときに、たまたま現職のバリスタさんとお話する機会がありまして。バリスタですって言われたときに、かっこいいなって思ったんですよ。おそらく、バリスタを探偵にしたミステリー小説というのはまだ数は多くないんじゃないかと思ひまして、これでいこうと。

はみだし
すてーじ

No らいふ No LIFE!
⇒いつもご愛読いただきありがとうございます!

はみだし
すてーじ

あの頃は…
⇒(◎ D ◎) ha!

(工・1 ダオ)
(なぜかしら；編)

—ネタを思いつく場所や時間はあるのですか？

考える以外にやる時間がない時間が多いですかね。TVを見ながらアイデア出すのは無理ですし、PCに向かってるときとかも、実際にタイプしながらアイデアが浮かぶってこともなくて、そういうときはPCを離れて考えるしかないですね。

—執筆されるにあたって心がけていることはありますか？

ちゃんと人の心の動きが織り込まれた小説になっているかという事は、常に意識してあります。有機的にどういふ心の動きが発生したからこういう謎が起きたのかというのを、きちんと物語として整理するという事に一番神経を割いていますね。僕は小説を書く上で、「読後感」というのを一番重視しているんですけど、その読後感を自分の目指すいいものにするためにしっかり布石を打っていく。これしかない結末に向かって物語が進むように、しっかり意識してやっています。



—サークルの方は何をされてましたか？

コピーバンドをメインとした軽音楽サークルに入って活動していました。週1回、教室でライブをやるっていう形で、練習したのを発表するみたいな活動でした。僕はギターボーカルでしたね。音楽は、中学生のときに母親のアコースティックギターを借りて弾き始めたのが最初ですね。割と早い時期から作曲りとかもしていて、高校のときにはもうオリジナルとかもやっていました。

在学当時は周りにもずっと音楽で食っていきみたいみたいなことは言っていました。だから、進学・就活という方向には進むつもりはなかったですね。就職の合同説明会みたいなのも1回も行ったことないです。

—なぜ音楽を辞められたのですか？

メインでやっていたバンドが高校で一緒にやっていたメンバーだったんですけど、大学生の間は福岡と京都で離れて暮らしていたので、活動自体あまりまとまらなくて結構構がゆい思いをしていたんです。

そうした中で、大学を出る頃になって他のメンバーはそれぞれ就職や進学といった道を選んでいったので、バンドの継続が難しい状況になりました。僕はとりあえず実家に戻って、お寺の手伝いをしながら音楽活動を続けていこうと思ったんですけど、ひとりいろいろとやってみた結果、割と早い時期に自分のやりたい音楽はひとりでは難しいなという結論に至りました。

☕ 京大生に向けて — 叶わないことばかりではない

☕ 学生時代の思い出 — 何でここにいるんだろう

—京都大学を目指されたきっかけは？

キムタクの『HERO』というドラマを見て、最初に法学部に行こうと思いました。それから高校生になって、とりあえず入学したときに志望校の欄に「一橋大」って書いたんです。そしたら担任から「あんたもうちょっと上行けると思うから、東大か京大にしなさい」って言われて、東大より京大の方が面白そうだなと思って、「じゃ、京大で」って。で、そのまま行けた感じですね。だから深い意味はないというか。

—勉強をしたくて、というわけではないんですね。

勉強に関しては、もう卒業するための単位をとる以上のことはあまりしていないんです。

ただ、4回生のときかな、通信教育で行政書士の資格を取得しました。資格を持っていたら就活が楽になるとかそういうのは知っていたんですけど、就活とか関係なく記念に取っておくみたいな感覚でした。勉強自体はちゃんとしたので、記念受験という形とはまた違うんですけど、あれはどういう思い付きだったんでしょうね(笑)。でもやっぱり、法学部にしっかり通わせてもらって、学費も親に出してもらって、何も自分の体内に蓄積されずに卒業するっていうことに申し訳ないような気持ちがあったので、それで多分、資格ぐらい1個取ってみるかと思ったんだと思います。

—周りには勉強熱心な人も多かったのではないですか？

京大ですし、やっぱり熱心している人も結構いました。みんながみんなではないですけど。その人たちみたいにすごくがんばって目的があって入ったら、入学してから苦しまなくて済んだのかなって……。

僕の場合は、高校の間でバンドを始めて、バンドで食っていきたくて思いを先に抱いた上で、それでもバンドのメンバーと離れたところにある大学に進学してしまったんですね。だから、何でここにいるんだろう、って思いはずっと強くて、大学時代はそれで相当苦しみました。



—小説家を目指す京大生に向けてメッセージはありますか？

しっかりやっつけていけば小説家はなれますよ。京大に行っている人だったら、誰でもなれると思います。あとはもう、書きあげられるかどうかの問題で。とにかく小説は書き始めたら書くべきだし、書くにあたって一切妥協しなければ、いずれは小説家になっていけると思います。僕はその点においては自分が特別だったとは全く思わないので……おいでおいでと思います(笑)。小説家は楽しいよ、って言いたいですね。

—京大生、特に新入生に向けてひとことお願いします。

大学生活を楽しんでほしいなっていうことに尽きますかね。楽しんで、いろんな選択肢というのを視野に入れて、思いっきり満喫して、それから自分の人生というものを築いていってほしいかなって。

新入生のオリエンテーションのアンケートに、「卒業するときどういふ学生になりたいですか」みたいな質問があって、それに僕は「この学年の中で数え上げられるくらいの有名な人間になりたい」って、確か書いたんですよ。それはまあ時間はかかったけれども、今は達成できたと思っっています。そういう意味で、大それた目標とかでも、丁寧にやっつけていけば叶わないことばかりではないので、本当に大学生活を楽しんで、やりたいことなり何か目標なりを見つけて、がんばってほしいと思いますね。

—ありがとうございました。

本誌P.10の「目から鱗」では岡崎琢磨氏の著書『珈琲店タレーランの事件簿』シリーズを紹介しています。そちらもぜひご覧ください。

勉強しましょう
⇒勉強より大切なモノなんて大学生には山ほどある！

(文・教 七氏)
(結果再試 3個奴；編)

ピカピカの1回生が羨ましい。
⇒時間の問題でしょう。

(法・1 ゴマちゃん)
(カビカビの3回生；編)